

## 報告

## 2020年度北海道支部大会報告

実行委員長（北海道支部長） 竹内 典彦<sup>A</sup>

第6回北海道支部大会を2021年2月27日（土）13時から、北海道情報大学を大会本部として、Zoom（オンライン）で開催しました。大会テーマは『新型コロナ以前と以後のグローバル人材育成教育』でした。

開会式は伊藤一正先生（北海道情報大学）による司会のもと、勝又美智雄会長によるご挨拶から始まり、筆者が支部長挨拶をして、4名が実践報告や研究発表をした後で、実践報告者を含む4名によるパネルディスカッションを持ちました。最後は福沢康弘先生（北海道情報大学）に閉会のご挨拶を頂きました。休憩時間を利用した2名の大学生の発表を含め、参加者は36名となり、アンケートでもよい評価をいただきました。ご参加くださりありがとうございました。

第1部（北海道のグローバル人材育成 高校編）では、伊藤先生が司会をされて以下の2組の発表がありました。

トップバッターとして、吉田努先生（北星学園女子中学高等学校、以下北星学園）が「高校におけるクラス全員留学の効果～ケンブリッジ英語検定による4技能効果測定～」のテーマで実践報告をされました。

『北星学園では、高校2年次の留学を必須としている。生徒は留学を通して成長するが、英語力のどの技能がどれくらい伸長するのか、また留学によって広がった世界の見方がどのように進路選択に影響するのだろうか。（1）全員留学の概要を紹介し、（2）留学の効果をケンブリッジ英語検定（以下、Cambridge Exam）を用いて4技能毎にCEFRで示し、（3）留学がその後の進路選択にどのように影響するのかを考察した。その結果、長期留学生も短期留学生も英語力を向上させた。特に、長期留学生の伸びほどの技能も

非常に大きく、中でもReadingが最も伸びたのは、授業の課題として、大量の読書が課されたためであると推測される。短期生も、素点を見るとすべての技能を向上させている。Listeningの伸びが大きいのは、ホストファミリーとのやり取りや学校の教員からの指示を逃さず聴こうと努力したためだと思われる。また、留学の有無は進路選択に大きく影響を与えるということだ。現在の高校2年生は、コロナ禍の影響で留学が経験できなかった世代であり、進学先で「これから留学ができる見通しがある」かどうかは重要な一つの判断材料となる。留学を経験するかどうかは、人生の選択に大きく影響する。』という報告でした。

続いて、山崎秀樹先生（北海道千歳高等学校、以下千歳高校）が「千歳高校とソウル空港高校とのオンライン姉妹校交流と参加生徒の変化」というタイトルで実践を報告されました。

『千歳高校は、1993年に大韓民国ソウル市立空港高等学校（以下空港高校）と姉妹校提携を結び、生徒、教職員とPTAの保護者の相互訪問を毎年行ってきた。ソウル市内に金浦空港、千歳市に新千歳空港がある「空港つながり」が縁で実現した。今年度は相互訪問が中止となったが、「交流を止めるな」を合言葉に、両校の協議で、34名の生徒によるオンライン交流が実現した。コロナ禍で往来できない中での苦肉の策であったが、本校で可能な限りのICT機材を使用し、校外では生徒個人のデバイス等を使い交流を維持することができた。日常からオンラインと相互訪問の両方を想定して計画を進めると相互訪問も充実するだろう。』という報告でした。

その後の10分間の休憩を利用しての非公式プログラムとして、北海道情報大学通信教育課程の河田有美香さんが「日本の英語教育と諸外国の英語教育の比較」というタイトルで卒業論文の内容を発表されまし

<sup>A</sup> 北海道情報大学経営情報学部

た。

続いて第2部(北海道のグローバル人材育成 大学・一般編)に移り、司会を中山健一郎先生(札幌大学)が担当されて、最初に正木幹生先生(北海道大学大学院)が「コロナ禍が引き起こす国際交流の拡大?」というタイトルで研究発表をされました。

『海外におけるリアルな交流は依然として重要であり、安全・安心を最優先として拡大するためには、関係者の創意工夫や関係者とのコミュニケーションはこれまで以上に重要となってくる。オンラインで参加できる学会やセミナーなどでこれまで以上に情報交換ができるようになることを期待したい。国際交流を取り巻く環境が変化していることを鑑みると、オンラインによるスタディツアーのように実際には行かないが、海外との交流は行われて学生の意識も変化するはずである。海外派遣・海外からの留学生数だけでなく、オンラインによる交流についても国際交流の実績のひとつとして検討されてもよいかと考える。』と正木先生は報告されました。

続いて小野真嗣先生(室蘭工業大学)が「海外渡航によらない国際交流活動の実践報告—実質化した活動あつてのオンライン交流—」というタイトルで実践を報告されました。

『本報告は、室蘭工業大学における国際交流活動について論じ、コロナ前の交流実績に基づいて、コロナ禍における海外渡航によらずに展開できた国際交流実践について報告するものである。発表時点において、コロナ禍となっておよそ1年を迎えるが、2021年度についても海外渡航による語学研修や単位互換留学などは、筆者は未だ大変厳しい状況であると考えている。2020年度、本学は全ての海外渡航型の研修プログラムをやむなく中止としたが、本学はいくつか萌芽的なオンラインによる国際交流や異文化理解に関する活動実施に比較的早期にこぎつけることができた。首都圏の大学でもオンラインによる学生間の国際交流が早々に始動し、また海外の協定校からのオンライン接続による語学研修なども紹介され、徐々に全国的に普及したと言える。これらはいずれも代替措置として講じられたものだが、本学が学生に提供した一連の国際

交流実践について話題提供させて頂き、情報共有を図るとともに、コロナ後の改善された環境に向け、本学単体だけでなく小中高の学校間連携によって地域内で展開できる可能性について検討できる機会になればと考えている。本学は首都圏の有名私大ではない地方の小規模国立大学であるが、協定校との関係維持を念頭に、実績のある活動をベースとしたオンライン国際活動に移行できた。まだまだ洗練は必要であるが、大学が有する海外学術協定校および自大学に在籍する外国人留学生という資源を一層有効活用して、コロナ禍の国際交流に努めたいと考えている。』と報告されました。

次の10分間の休憩を利用しての非公式プログラムで、北海道情報大学通信教育課程の伊藤彩加さんが「グローバル人材の条件と英語力」というタイトルで卒業論文の内容を発表されました。

その後、第3部に移り、小野真嗣先生(室蘭工業大学)が司会者になりパネルディスカッションが開かれました。テーマは「ウィズコロナの時代ではどんな国際交流活動ができるのか—地域内・学校内におけるグローバル人材の育成と共有—」でした。

パネリストの一人である山岸充明先生(北海道登別明日中等教育学校)が、「北海道登別明日中等教育学校の国際交流事業および英語科の取組—グローバルに活躍することのできる人材を育成するために—」と題しまして、報告されました。

『コロナ禍におけるオンライン交流として、スーパーグローバルハイスクール事業下で実施してきたテレビ会議をヒントにして、オンライン交流へとシフトするようにしたことは、本校の国際交流や異文化交流に新たな方法をもたらした。当初は海外へ行くことができないことに対する興味や関心の低下を予想していたが、海外の人たちとコミュニケーションを変わらずとることができることや、海外に一人で留学することへの不安を和らげるという点においてオンライン交流は非常に有効であった。また、渡航費や宿泊費をかけることなく誰でもコミュニケーションをとることができたり、紹介したい素材が身近にあることでより自分の地域について伝えることができるようになった点から

も、本校生徒にとって有効であった。特に英語力に不安を感じている生徒にとっては、周りにサポートしてくれる仲間がいる中で海外の生徒と英語でコミュニケーションをとることに挑戦することができ、異文化理解への関心を高めるだけでなく、海外で滞在していく自信をつけることにもつながった。本校において、オンライン交流は国際交流や異文化交流をより身近に感じさせるものであり、生徒にとって海外で生活することへの不安を和らげてくれるものである。コロナ禍でオンライン交流はまだまだ続くと考えられるが、その効果や有益性から海外派遣が再開された後も国際交流の一つの選択肢として活用していくことで、生徒の実態に即した国際交流が展開できると期待している。』と報告されました。

続いて、タケ・ディビッド先生（函館工業高等専門学校、以下函館高専）が、「International Programs at NIT, Hakodate College: challenges, rewards, and prospects（函館高専の国際プログラム：挑戦・報酬・展望）」と題しまして報告されました。

『これまで166名の短期の留学生を受け入れ、73名の学生を海外に派遣してきた。最近始まったのはイタリアへの1週間の文化交流プログラムである。またフランス、ベルギー、シンガポールにはインターンシップとして学生を派遣してきた。日本学生支援機構や函館高専独自の給付型奨学金を受けて、特にフランス・ベルギーへの6～12週間程度のインターンシップは成果が大きい。指導教員や同年代のチューターもつく。費用も学生の負担をできるだけ小さくするために、航空券や宿泊施設を選定している。期間中は実験

室での作業だけでなく、文化研修や語学研修もプログラムに含まれている。海外から函館高専に来る留学生は学校全体により影響を与えている。今後はより長期にわたる海外インターンシップや教職員の相互交流も活発化していきたい。』とお話されて、特にフランスやベルギーという海外交流ではあまりなじみがない国での報告に、多くの参加者から質問が寄せられていました。

以上の発表者の報告は、それぞれが示唆に富むものであり、たいへん貴重な情報提供でした。大会のアンケートで「印象に残ったプログラムは？」と問いかけたところ、休憩時間中の学生の非公式プログラムを含む全ての報告に対して「印象に残った」という意見が寄せられました。

パネルディスカッションと大会全体の総括として、勝又会長よりコメントがなされましたが、「北海道支部大会がますます進化している」というお褒めの言葉もいただきました。

閉会式は、中山先生の司会で、学会理事の福沢康弘先生に閉会のご挨拶を頂きました。

最後にアンケートに寄せられた参加者の声をいくつか紹介します。

『大学に限らず、高校まで範囲を広げたプログラムで、北海道地区のグローバルの取り組みを拝聴でき、大変勉強になった』『コロナ禍の課題と積極的な取り組みのご発表から、大変勉強させていただいた』『オンライン留学や異文化研修の実践報告で有用な情報が得られた』

受付日 2021年3月8日、受理日 2021年3月13日